

---

# 私と彼だけの大事な日…

聖司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と彼だけの大事な日…

### 【Zコード】

Z6398A

### 【作者名】

聖司

### 【あらすじ】

私は一年前に幼馴染の彼を亡くした。今日は私にとって一年で一番大事な日……彼との一番大事な日

まだ暁過ぎだというのに今田はやけに空が暗く、じめつとしていた。しかし、それは私だけが思っているだけなのかもしれない。今日、それは毎年、私にとつてとても大事な日だからだ。今も、そしてこれからもこれは変わらないだろう。

二年前、私が高校一年生のとき、私の彼、幼馴染で同じ年だった彼が亡くなつた。やつとお互い気持ちを伝え合い、付き合い始めた矢先のことだつた。あの時のこと思い出すと今でも涙が溢れ出す。案の定、今も私は目にいっぱいの涙をこらえながら出かける準備をしていた。身支度を済ませ、小さく部屋を見渡し、アパートの自室を出て鍵を閉めた。

「行つて来ます……」

私は誰もいるはずのない、一人暮らしの自室にむかつて小さく言った。たいした意味のない、しかし今日に限つてはとても大事な儀式のようなものだつた。外にでると田の前にある通りに一台のタクシーが止まつっていた。あらかじめ私が呼んでおいたものだ。フロントガラスを覗き込むと運転手が携帯電話をさわつていた。ふつくらとした、白髪交じりのおじさんだつた。ふと、目が合いおじさんは優しい笑顔で軽く会釈をした。私も釣られて、涙をこらえたまま、会釈をした。おじさんが運転席を弄ると後ろの客席のドアがひとりでに開いた。

後ろに乗り込み、大きく深呼吸をした。そうしなければ、今にも泣き出してしまいそうだつた。

「どうらままで？」

おじさんがあわらかい声でそう言つた。しかし、私は声を出すことができなかつた。今、口を開くと嗚咽を漏らしそうだつたからだ。

「……お密さん？ どちらまででしょうか？」

おじさんは涙田の私に氣を遣つてくれたのか、少し待つて、また優しく聞いてくれた。

「……三崎遊園地まで…」

小さくそう言つのがやつとだつた。ちゃんと聞こえただろうか？ 私は少し心配になつたが、おじさんはまた、やさしく、「はい」と返事をしてくれた。

車窓に映る風景がゆっくりと変わり始めた。私は窓に寄りかかり、外を呆然と眺めていた。彼とはたつた一度だけ、デートをしたことがあつた。彼から誘つてくれたものだつた。うれしそうに遊園地のチケットを持つて私に言つてくれた。

「今度の週末に三崎遊園地に遊びにいかない？」

私達が住んでいた場所から三駅離れた場所にある小さな遊園地だつた。それでもアトラクションはしつかりしていて、休日には割と家族連れのお客さんが来ているようだつた。デート当日の朝、私は寝坊して少し待ち合わせ場所に遅れたのをよく覚えている。家自体はすぐ近くなのに、どこか恥ずかしかつたのか、家から少し遠くで待ち合わせしていたのをよく覚えている。あの日の事は一年経つた今でも鮮明に覚えていた。待ち合わせ場所には、先に彼が到着していた。彼に「ごめんね」と謝ると、「俺も今来たところだよ」と笑顔で答えてくれた。少し彼は落ち着かない様子だつた。電車に乗つて話をしながら遊園地にむかつた。ただそれだけの事だつたけど私はそれすらも嬉しく感じていた。今思つと昔からずっと好きだつたのがよく解つた。

ぱつん ぱつん ぱらぱらぱらぱら

気づくと窓の外は一段と暗くなつた氣がした。車体を強く雨が叩いている。それに釣られるよつて今まで堪えていたものが一筋だけ、頬に流れていった。

「今年も降つたね」

誰に言つわけでもなく、自分だけに聞こえるように言つた。おじさんにはエンジン音と雨音がかき消して聞こえなかつたようだ。

「……もうそろそろ着きますよ。」

しかしさつきの言葉に答えるようにバックミラーを見ながらおじさんは優しく言つてくれた。私は急いで頬を拭つた。

遊園地の前にゆっくりとタクシーは止まつた。料金メーターを見て財布を取り出そうとして運賃を精算した。またひとりでにドアが開いた。

「お客様、傘は持つてありますか？」

おじさんは心配そうに私にそう聞いた。私は、「いいえ、でも大丈夫です」と精一杯の笑顔を作つて答えを返した。

ゆっくりと外に出て遊園地を見た。雨のせいいか空気が重かつた。雨が次第に私の髪と服と心を濡らしていく。私は入場券を一枚買つて中に入つていつた。

「あの時のまま…」

去年も言つたであらう言詞を口にした。そう、去年も悲しみに暮れながらここを訪れた。しかし、今は去年ほど悲しみに包まれていなかつた。それでもまた、時を重ねる毎にこの思いは風化していくのかと感じ、悲しみを呼んだ。

すでに六時を廻つていた。辺りはいよいよ暗さを増していた。それでも私は彼との約束の場所へとむかつた。

遊園地に着いた私と彼は少し途方に暮れていた。私は絶叫系の乗り物には乗れなかつたのだ。案の定、さしてやる事のなくなつた私達は遊園地の真ん中にある大きな噴水にいた。噴水の前には白い椅子とテーブルが並んでいて私達はそこに座つていた。私があまり楽しくなさそうに見えたのか、彼はしきりにごめんねと言つてくれていた。私は彼と一緒にいれるだけでよかつたが、彼にとつてこのデートは失敗だったようだつた。時間も過ぎていき、いつの間にやら辺りは暗くなつっていた。そして

ぱつ ぱつ ぱりぱらぱらぱら

間の悪いことに急に雨が降つてきてしまった。私は席を立ちどこか屋根のある場所に行こうとしたが、彼も一緒に席を立つたが、しばらく噴水のほうを見て動かなかつた。

「どうしたの？」

私が聞くと、彼は少し遅れて「こここの噴水を、俺の思い出いっぽいあるんだ。家族で来たときとか、友達と遊びに来たときとかさ。……だから、君ともここで思い出、何かほしいと思つてここにきたんだけど……」

そう言つて彼は濡れた頭を搔いていた。そのとき、私は彼のためにプレゼントを買ったのを思い出した。それを上着のポケットから取り出して言つた。

「じゃあ私からプレゼント。今日はありがとうね。」

そう言つて彼の手をとつて手のひらにひとつ銀色の指輪をのせた。彼は嬉しそうにぎゅっと指輪を握り締めて、私をぎゅっと抱きしめてくれた。

「ありがとう。」

彼は耳元でそつ咳いてくれた。

「また来年もここに来よう。この噴水の前に。きっと、来年も二人のいい思い出ができるそうだ」

彼はそう言つたあとに、そつと唇を重ねた。

自分の唇を指でなぞりながらあの時のことと思い出した。私は今、雨に紛れて大泣きしているだらつ。雨が地面を叩く音に嗚咽が混じつっていた。

カツン カツン……

私の後ろから誰かの足音が聞こえた。でもきっと今の私はひどい顔してるだらうから後ろを振り向くことはなかつた。

「そんなに雨に濡れちゃ 風邪ひくよ。」

懐かしい声が聞こえた気がした……。ゆっくり後ろを振り向くと

同じくらいの歳の見知らぬ男の人人が傘も差さずに立つていた。左手

の中指には見覚えのある銀色の指輪をしていた。

「どうしたの？ そんなに泣いて…何か悲しいことでもあったの？」  
男の人は懐かしい声で、彼とよく似た口調で、私に優しく話しかけた。

「待った？ 去年の約束の日からずいぶん時間経っちゃつたけど

」  
私はぽろぽろと頬を濡らしながら彼を見ていた。やつとの想いで  
「……今来たとこ……」

と言つた。それを聞いて、彼は私の肩をぎゅっと抱いた。「あり  
がとう。」つと耳元で囁いてくれた。

「また来年もここに来よう。この噴水の前に。きっと来年も一人の  
いい思い出になりそうだ。」

彼はあの時と同じように、同じ台詞を言つた。あの時に戻つたよ  
うで私は泣きながら彼を抱きしめていた。ふと、あの時とは違う台  
詞を一言つけたした。

「今度は笑顔でね」

彼は笑顔でそう言つてくれた。

私はどびきりの笑顔で答えてあげた。

(後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございました。今回はちょっと不思議な？ 切ない？ 恋物語？ なのかな？ を書いたつもりです。

もしよろしければ、感想を残して頂けるとうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6398a/>

私と彼だけの大変な日…

2010年10月8日15時14分発行